

研究課題	ICTの「よりよき使い手」となる子の育成に向けたモデルカリキュラムの開発
副題	～モデルカリキュラム開発に向けたデジタルシティズンシップ教育の授業改善～
キーワード	デジタルシティズンシップ メディア・リテラシー
学校/団体名	公立札幌市立中央小学校
所在地	〒060-0041 北海道札幌市中央区大通東6丁目12
ホームページ	http://www.chuo-e.sapporo-c.ed.jp

1.1 研究の背景

本校は札幌市のGIGAスクール構想のモデル研究校として「一人一台端末」の利活用について研究推進してきた。児童・教職員の操作スキルは飛躍的に向上してきた。一人一台の環境整備により、教育とICT活用は切っても切り離せないものになった。一方で、これまでの情報モラル教育では賄いきれない「不適切な利用」が浮き彫りになってきた。また、学校外でのスマートフォン等によるトラブルに関する生徒指導案件も増加傾向にある。児童が抱える様々な背景を鑑みても全校で検討していく必要がある。内閣府総合科学技術・イノベーション会議教育・人材ワーキンググループにおいても次のような指摘がある。「デジタル社会の負の側面を最小限にするために、『させない、触れさせない指導の情報モラル教育』から『自分たちの意思で自律的にデジタル社会と関わっていくためのデジタルシティズンシップ教育』の充実が欠かせない。一方で、現状はそのコンテンツや教育手法が十分ではない。カリキュラムの基準の提示や教職員研修など、日本型のロードマップを作って自治体をフォローしていくことが必要ではないか。」（戸ヶ崎 2021）

昨年度はEdTech導入補助を受け、デジタルシティズンシップに関するサービスの導入検証を行った。これまでの教育課程に位置付けていなかった領域と向き合うことで、教育課程の見直しと全学年のカリキュラム作成が急務となった。様々な環境で生まれ育ってきたデジタルネイティブの児童を「よりよき使い手」となった「デジタル市民」の育成を目指す。

1.2 問題の所在

ICTの「よりよき使い手」となるための重要な要素であるメディア・リテラシー教育においては、その必要性が高まっているにも関わらず、進展しているとはいえない状況について、佐藤(2017)は次のように指摘している。「学習指導要領でメディア・リテラシーという文言が取り扱われていないということだけではなく、教師が多忙であることや、教え手である教師自身がメディア・リテラシー教育を受けてこなかったことも要因として挙げられる。」また、教員のみならず、小学校入学以前保護者について次のような指摘がある。「保護者自身が自分の幼児期にICT機器がなかったことや、幼児へのICT機器の使いかたについて学ぶ機会がなかったことから、自分の子どもにいつ頃からどのように使わせて良いのかが理解できないことで、子育ての便利なツールとして利用しつつも、幼児にICT機器を使わせたくない、又は幼児が使うことは良くないといった考えが根底にあるのではないか」（勝見、田村、藤村 2019）

これらのことから、学習者である児童はもちろんのこと、児童を取り巻く大人の意識の変化が必要であると考えた。特に、被教育経験の影響や教育的意義の理解が大きいのではないかと
いう仮説のもと、研究の目的を次のように示す。

2. 研究の目的

本研究は実証実践を通してデジタルシティズンシップ教育の有効性を明らかにすることである。そのために以下の3点について明らかにしていく。

- (1) デジタルシティズンシップ教育の具体的な実践事例と教育的意義や課題の検証
- (2) 全学年対象のモデルカリキュラムの開発と系統的な授業の実施と授業改善
- (3) 保護者との連携へのアプローチの具体的な実践事例と教育的意義や課題の検証

本研究で得られた成果を札幌市内、北海道内へ共有し、「よりよき使い手」となる子の育成に寄与していきたい。

3. 研究の経過

月	取組内容・方法	研究の評価
4	校内研究組織設立・職員研修 ・学年研修 研究相談(オンライン) 助言：今度珠美先生	授業記録 TC表 写真 ワークシートなどへの 児童の記述 授業動画 討議記録 助言記録
5	日常実践：1年「chromebook でなかよくなるろう」HP 公開	
6	研究相談(オンライン) 助言：中橋雄先生	
7	研究相談(オンライン) 助言：中橋雄先生	
8	授業検討(1, 2, 3, 6年)(オンライン) 助言：今度珠美先生	
9	研究授業：1年「メディアとじぶんのきもち」 2年「これって本当？」 3年「あなたの個人情報はどう守る？」 6年「加工・編集した写真や動画を発信するときの責任とは？」 研究討議・教員研修 講師・助言：今度珠美先生 保護者講演会 講師：今度珠美先生 研究相談(オンライン) 助言：中橋雄先生	
10	研究授業：4年「事実をわかりやすく報告しよう」 研究討議・教員研修(オンライン) 講師・助言：今度珠美先生 授業検討：5年(オンライン) 助言：今度珠美先生 研究授業：5年「困ったそのとき、次の行動を考えよう。」(オンラインゲーム編)	
11	土曜参観：4, 6年生 保護者への授業公開 研究討議・教員研修(オンライン) 講師・助言：今度珠美先生 教育家庭新聞第93回教育委員会対象セミナー 登壇 「ICTの『より良き使い手』を育成するモデルカリキュラムの開発」 日常実践：5年「その情報、シェアする？」NHK 札幌放送局取材 「おはよう北海道」内でデジタルシティズンシップ教育について特集	
2	研究相談(オンライン) 助言：中橋雄先生	
3	研究のまとめ	

全学年での研究授業を年間の教育課程に位置付け、全教員が授業を行った。研究授業ではない日常実践も含めると全校で40本以上の授業を実施した。1年を通して、授業に関する助言を国際大学 GLOCOM 客員研究員の今度珠美先生に、研究に関する指導を日本大学文理学部教授の中橋雄先生にいただいた。

4. 代表的な実践

デジタルシティズンシップの領域のうちメディア・リテラシー分野に焦点化した2学年の実践を紹介する。

(1)第2学年「これって本当？」

学習場面においてタブレット端末の利用機会が格段に増え、落ち着いて情報を受け取り、情報とよりよく向き合うための実践が低学年段階でも不可欠である。本実践では、普段の生活でどのように情報を手に入れているのかメディアに対する認識をもたせ、児童が普段目にするテレビCMを例に情報との向き合い方を考えていく。



図1.授業の様子

① 批判的な視点の獲得

例として柔軟剤のテレビCMを視聴させる。気付いたことを交流する場面では、「いい匂いするよね。」「うちもこれ使っている。」と商品に関する気付きばかりである。しかし、本時の中心発問「何が本当かな?」という一言で児童の動画に対する視点に変容する。もう一度、同じCMを再生した際には「あっ!ここは本当じゃない。」とすぐにCMに用いられている効果的な表現に目を向ける反応を示した。

続いて、ランドセルのCMを再生した。初めの数秒で教室中が反応する。「実際はこんなキラキラは目に見えないよ。」「ランドセルから羽根は生えていないよね。」という児童の発言から、情報に対する批判的な視点を獲得したことが明らかとなった。

② 作り手の意図を捉える

CMの作り手が何を意図して表現しているかを理解させることは本実践には不可欠である。授業の後半では、商品やサービスの魅力を伝えるための誇張された表現に騙されてはいけないという指導ではなくなぜそのような表現をしているのか、それによって何を伝えたいのかを落ち着いて考えて情報を受け取ることができるようにする。このような手立てをとることで、児童はテレビやタブレット端末をはじめとする多様な情報の受け手として適切に読み解いていこうとしていく。児童の振り返りからもこれからの自分がどうあるべきかを考える記述が見られた。

◎ふりかえり(思ったこと、気づいたこと、CMの見方のこと)

これからどうそのことと本当のことを見分けて見てみたい。

◎いろいろなCMを見て気づいたこと

CMをつくらした人は、なにがをつたえようとしていること。か。てはいいからはいけいをつけたりしていること。

◎ふりかえり(思ったこと、気づいたこと、CMの見方のこと)

いろんなCMをみて本どうどうを見つけてるのがたのしむた。

図2.実際の児童のワークシート記述

(2)第6学年「加工・編集した写真や動画を発信するときの責任とは？」

時数	授業
----	----

実際に SNS アカウントをもち、情報を発信している児童も少なくない。送り手が「伝えたかったこと」と受け手の「伝わったこと」が一致するとは限らない。適切なコミュニケーションのためのリテラシーを身に付けていく必要がある。本実践は総合的な学習の時間に行い、計 4 時間の単元として実施したものの 2 時間目にあたる。4 時間目は国語科「メディアと人間社会」(光村図書)の学習と関連させ、単元を通して、情報通信技術の発展により便利な社会になっていく中で、これからの自分はどのように生きていけばよいかを思考する。

1	発信する情報の影響は？[責任のリング]
2	加工した写真や動画を発信する本時 責任とは？
3	この情報、みんなはどうする？ [フェイクニュース]
4	未来の社会を生きるには？[これからの自分は？]

① 人間の心理に迫る

加工された画像や動画を見てそれぞれの目的を話し合うことから始まる。例えば、ファッション雑誌の表紙を飾るモデルをより美しく見せる加工や 2 種類の動物を合成したフェイク画像である。なぜ画像の加工する必要があるのかを問うと、児童からは「よく見せようとするため。」「その商品を買ってもらうため。」「人の注目を浴びたいから。」などという考えが出た。このことから、画像の加工の目的を人間の心理的な側面から捉えていると判断できる。

② 多様性の中で学ぶ

中盤の加工はどこまで許容できるかを「許せる場合」と「許せない場合」を分類する活動では、個人で考えまとめたあとグループで話し合った。「許せる場合」に「人が傷つかない」という記述が見られるが、どれくらいで傷つくかというのは、個人によって異なる。前時の学習を生かして、「自分」や「友達」などの範囲を限定することで責任ある発信者となるように思考する姿が見られた。

デジタルシティズンシップ	
課題 加工・編集した写真や動画を発信する責任とは？	
<許せる場合> ・ペンギン動画 「エイプリルフルだから」 みたいなのが、コメントしてあったらいいと思う ・トラ鳥 自分のスマホの壁紙とか自分のことだったら○ ・UFO 映画のシーンなどだったらいい 人が傷つかない	<許せない場合> ・パンケーキ お店だから 値段通りではないから ・まつげ 現実的じゃない 考えられない 誰もやりたくないと思う。 詐欺になる お金が関係する場合

デジタルシティズンシップ	
課題 加工・編集した写真や動画を発信する責任とは？	
<許せる場合> ・自分がとった写真などで合成して友達と楽しむ ・エイプリルフルで楽しむ ・「フィクションです」という説明 ・害がないなら ・人が傷つかない ・ジョーク ・嘘ってわかる(誰も信じない)	<許せない場合> ・人を騙して金を奪おうとする ・許可なくその画像を使って動画をあげたりする ・害がある ・詐欺 ・度が過ぎた嘘 ・他人に迷惑

どちらの実践においても、情報の作り手・送り手は騙す意図がなくても受け手が「騙された。」「うそだ。」と受け取ることがあることを児童は捉えていた。2 年生実践の場合、教師側が必ずしも騙そうとしているわけではないことを補足し、「何を伝えたいのか」を考えさせたことで送り手の意図を想像させることができた。6 年生実践では、児童が画像加工の目的を話し合う活動を通して、送り手の意図について考えることができた。さらに、「映画のシーン」や「フィクションです。という説明」という記述があるように、その情報が事実かどうかに関係なく、作られた情報をフィクションとして楽しむことも含め、情報と向き合っていることが明らかになった。

また、感じ方や捉え方には個人差があることに触れることが不可欠である。従来は、教師が知識や価値を線引きして授業のまとめとしていたが、デジタルシティズンシップ教育において

は、授業で行動規範の方向性を示してはいくものの、社会には多様な価値があり、さまざまな考えがあることを知る上で、自分がどのように振る舞っていくのかを考えていくことが大切である。

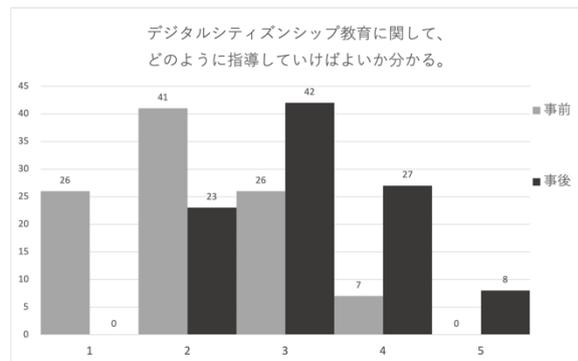
5. 研究の成果

前期と年度末の学校評価アンケートから以下のことが明らかになった。ただし、児童向けの調査は「あなたは、タブレット端末の活用を通し、ルールを守った正しい情報技術の活用(正しい使い方での活用)ができていましたか。」としている。

[デジタルシティズンシップ教育]													
育]子どもたちは、タブレット端末の活用を通し、正しい情報技術の利用ができていましたか。	9月		年度末		9月		年度末		9月教		年度末		
	児童	%	児童	%	保護者	%	保護者	%	職員	%	教職員	%	
とてもそう思う	469	60.2	457	59.0	121	26.2	134	36.8	3	9.4	10	23.8	
そう思う	275	35.3	286	36.9	285	61.7	210	57.7	22	68.7	27	64.2	
あまりそう思わない	27	3.47	25	3.2	52	11.3	19	5.2	7	21.9	5	12.0	
全くそう思わない	8	1.03	7	0.9	4	0.8	1	0.3	0	0	0	0	
合計	779	100	775	100	462	100	364	100	32	100	42	100	

児童における変化はほとんど見られなかったが、保護者で「とてもそう思う」が10.6%上昇し、教職員でも「とてもそう思う」が14.4%上昇した。これは、これまでの教育観との違いを実感した大人と今受けている教育が当然のものとして捉える児童との間にある被教育経験の差が現れたのだと考える。保護者アンケートの自由記述欄からは「『デジタルシティズンシップ教育』では、『正しい情報技術の利用ができて』いるか否かを判定できるレベルに、まだ子どもが達していないため、『あまりそう思わない』としました。ですが、正しい利用に向けての端緒にはついており、教育の成果は上がっていると感じています。」「学習発表会の内容からデジタルシティズンシップについてかなりしっかり教育して頂いている印象でした。デジタルネイティブ世代の子供たちですが、親の方が知識が乏しいこともあるため、親子で学べるいい機会だったと感じました。」とあり保護者との連携において一定の成果がみられた。

学校評価とは別に実施した、デジタルシティズンシップ教育研究についての教員アンケートからは、授業実践を通して「どのように指導していけばよいか分かる」と肯定的に回答した教員は増え、全体として分布が右にシフトしたことは大きな成果といえる。これらのことから、デジタルシティズンシップ教育の有効性を明らかにすることができた。



6. 今後の課題・展望

教科教育の目標とデジタルシティズンシップ教育研究の目標が二重構造になっているため、授業の評価の曖昧さがみられた。しかし、本実践はあくまでも教科教育の一環として位置付けていたため、今後も教科教育の目標に従いながら、どれだけデジタルシティズンシップ教育に取り組めるかを検討することが必要である。また、学習指導要領に位置付いている教科教育でこそ ICT の「よりよき使い手」が育まれるべきであると考え。引き続き、そのための指導体制の維持と継続的な実践を積み重ねていくことが不可欠である。さらに、小中一貫した教育の観点からも同一中学校区における9年間を見通した指導とその方法を明らかにしていきたい。

7. おわりに

本研究にあたり、授業づくりや教員研修、保護者講演会に御協力いただいた今度珠美先生(国際大学 GLOCOM 客員研究員)また、研究をサポートしていただいた中橋雄教授(日本大学)に感謝申し上げます。

8. 参考文献

- ・勝見慶子, 田村隆宏, 藤村裕一(2019) 幼児の ICT 機器利用に関する保護者の認識に及ぼす教育効果. 教育メディア研究. 25(2)1-11
- ・坂本旬・豊福晋平・今度珠美・林一真・平井聡一郎・芳賀高洋・阿部和広・我妻潤子(2022) デジタル・シティズンシップ プラス-やってみよう! 創ろう! 善きデジタル市民への学び-大月書店
- ・佐藤和紀(2017) メディア・リテラシー教育の関する教師教育, 中橋雄編, メディア・リテラシー教育: ソーシャルメディア時代の実践と学び, 157-172 北樹出版
- ・中橋雄(2021) 【改訂版】メディア・リテラシー論-ソーシャルメディア時代のメディア教育-北樹出版
- ・Society 5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ<中間まとめ>内閣府 <https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouikujinzai/chukan.pdf>
- ・総合科学技術・イノベーション会議 教育・人材育成ワーキンググループ(第4回)配付資料 資料3 戸ヶ崎委員より提出資料
<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouikujinzai/4kai/siry03.pdf>